

## 第一章

「はあっ♡はああっ♡は——っ♡は——っ♡」

四つん這いの姿勢で後ろからのし掛かられてシートへぺたりと頬をくつつける。

胎内を、限界まで膨らみきった肉棒が埋め尽くしている。

ぐりい……♡と奥に切っ先を擦りつけられると、ずくん♡ずくん♡とお腹の底が疼く。

「……っあ……♡」

秘奥までぐっぽり埋め込まれた肉棒が引き抜かれると、ぞぞぞぞ♡と褻がめくられてお腹の底からじわつと甘痺れが這い上ってくる。

「チン媚びすごいね……♡おまんこのヒダヒダが絡みついて、ちんぽ

を離してくれないよ……♡

オリヴィエが恍惚とした顔でぺろり、と上唇を舐めた。

「うあ……♡だつてっ♡おちんぽがっ♡ごりごりっ♡ナカっ♡決るか  
らあ……♡」

「それだけ、僕のちんぽを愛してくれているんだね……♡いじらしい  
おまんこだ……♡」

ばっちゅ♡ばっちゅ♡ばっちゅ♡ばっちゅ♡  
持ち上げたお尻に、力一杯股間をたたき付けられる。

ごっちゅ♡ごっちゅ♡ごっちゅ♡ごっちゅ♡  
エラが肉天井を抉り、秘奥に楔を打ち込む。

重だるい衝撃が子宮に響き、じんわりと染み渡る快感にゆっくり押  
し上げられていく。

(あ………♡もうすぐ、イキそ………♡)

押し寄せるアクメへの期待にきゆう♡とおまんこが締まる。

オリヴェイエに抱かれるようになって、どれくらい経つたのだろうか。彼と交わる度に頭の芯がぐずぐずに蕩かされて、何も考えられなくなつてゆく。

空っぽの頭の中に詰め込まれるのは、彼の甘やかな囁きと五感を絡め取るようなエクスタシーだけ。

思い出したいのに、何も思い出せない。私はずっとこのままなのだろうか？

「……大丈夫。君は何も考えなくていい。ただ………僕に身を任せて

………」

背後から抱きすくめられ、柔らかな声が耳朶を打つ。

囁きを耳の中に流し込まれると、思考がほろっと崩れ落ちて――

(イキたいっ♡イキたいっ♡イキたいっ♡)

あつという間に頭の中が♡で埋め尽くされる。

私は頭をシーツに擦りつけ、めいっばいお尻を持ち上げておちんぽを食いしめた。

「ん——おっ♡おおおくく………♡♡♡♡」

「……っ♡はああ……っ♡すごいね……♡おまんこがちんぽ大好き♡  
つてすがりついてくる……♡ね、君も僕のこと大好きだよね？」

確かめるような問いかけに、ためらうことなくうなづく。

「ん……す……き……♡」

「嬉しいな……ずーつとこうして、愛し合っていようね……♡」

私の顎を捉え、オリヴィエがちゅ、と唇を寄せる。

(あ……これ……また……♡)

自分の輪郭が溶けていくような感覚に囚われる。心地良い。

自分が自分でなくなつて、カラダだけになつていくような――

「君は何も考えなくていい。全部忘れて……ただ……気持ち良くなつて……♡」

頭の中に、オリヴィエの低く甘い声が響く。

甘い唾液をたっぷり♡まぶした舌に吸いつき――私はうつとりと目を閉じた。

――数週間前のこと。

目が覚めると、見知らぬ部屋のベッドに寝かされていた。

なめらかな白い薄絹に、真珠をあしらった豪華な天蓋。

柔らかな陽射しが射し込む窓辺に活けられた、桃色の薔薇。

美しい銀細工を凝らした鏡台。

見慣れないものばかりで、頭が混乱する。

どうして自分がここにいるのかすら分からない。

ここに来る前は……どこにいて、何をしていたんだっけ？

「おや、目が覚めましたか」

ベッド脇にいたお医者様らしき中年男性が穏やかに微笑む。

「あの……ここは……どこ、ですか？ 私……どうしてこんなところに……？」

身を起こし、おずおずと尋ねる。

お医者様は「ふむ」と顎に手をやり、いくつかの質問を投げってきた。

自分の名前、年齢、身分、両親の名前、住所……

問いかけられる度に懸命に思い出そうとするけれど、頭の中が空っぽで何一つ浮かんでこない。

困り果ててぼろぼろと涙をこぼす私へ、お医者様が優しく教えてくれた。

「……どうやらあなたは、事故のショックで記憶を失っているようです」

私は地方へ視察に出かけるため馬車に乗って移動中、崩落事故に遭ってずっと意識を失っていたらしい。

奇跡的に怪我はなかったものの、馬車から投げ出された時に頭を打つたらしく、その衝撃で記憶が一時的に抜け落ちているのではないか

——とお医者様は説明してくれた。

同乗していたリシャールという男性は意識不明の重体で、ずっと床に就いたままらしい。

でも、私が彼とどういう関係だったのか、事故の直前までどういう会話をしていたのか……何も思い出せない。

まるで頭の中を真っ白に塗りつぶされてしまったかのよう。

(私……これからどうしたらいいの……?)

「目が覚めたんだね！ 良かった……！」

不意に扉が開き、プラチナブロンドの髪の毛が部屋へ入ってきた。

(わ……すごく綺麗な人……)

絹糸のように滑らかで、クセのない髪。白く透き通る陶器のような肌。完璧に整えられ無駄のないフェイスライン。

そして——深いエメラルドグリーンの瞳。

どれをとっても完璧で、まるでおとぎ話に出てくる妖精王のように美しい。

「このままずっと目覚めないかと思うと……胸が張り裂けそうだったよ。本当に良かった……！」

彼がベッドの横にひざまずき、私の手を取って頬ずりする。

「……っ！」

びっくりして、思わず手を引っ込めてしまった。

「……どうしたの？」

男性が不思議そうに私を見上げる。

「すみません……見知らぬ方に手を握られて、驚いてしまった」

「……何を言ってるの？ 僕だよ、オリヴィエだよ。忘れてしまったの？」

男性が引きつった顔で訴えかける。どうやら彼と私は深い関係だったようだけれど……やっぱり何も思い出せない。

「彼女は、事故のショックで一時的に記憶を失ってしまっているようです」

お医者様に説明され、オリヴィエの顔が絶望に染まった。

「……記憶を……？　なんてことだ……!!」

「……ごめんなさい……」

うろたえる彼の様子に申し訳なきが募って、ギユツと掛け布団の裾を握りしめる。

「いや……君が謝る必要はないよ。ひどい事故だったからね。怪我がないのが不思議なくらいだよ」

オリヴィエは口元を緩め、改めて私に手を差し出した。

「僕の名前はオリヴィエ・ド・ゴール。この国の王太子だ。そして、君は僕の婚約者だよ」

「こん……やくしや……?」

「そう。僕たちはとても愛し合っていたんだ。来月晴れて婚礼の儀を執り行い、正式な夫婦になる予定なんだよ」

透き通るようなエメラルドグリーンの瞳から向けられる、愛に満ちた温かな眼差し。きつと以前の私は、彼に見つめられて胸をときめかせていたのだろう。

なのに、何の感慨も湧いてこない。

「……ごめんなさい。何も思い出せなくて」

うつむいて唇を噛みしめると、オリヴィエが私の肩に手を置いた。

「大丈夫。これから思い出していけばいいんだから」

触れた指先のぬくもりが、肌に染み込むようで。

一人、砂漠に投げ出されたような心細さに戸惑っていた私の心を、ゆつくりと溶かしていく。

「今は、何も考えなくて良い。君が安心して生活できるように、僕が全て整えてあげる」

私の頬を包み込み、彼がじつと私を見つめる。

誠実そうな眼差しを受けておずおずと頷くと、頬に軽く口づけられた。

「……………」

「あ……………驚かせちゃったかな？」

「は、はい……………申し訳ありません。こ、婚約者なのに……………」

「こちらこそごめん。僕はずっと君を知っているけれど……………君にとつ

ては今の僕は初対面みたいなものだよね。それならこれからは初めて  
同士として、僕のことをゆつくり知ってもらいたいな」

「……いい、いいんですか？ そんな……」

「うん。だからもう一度僕を好きになつてくれると、嬉しいな」

なんて慈愛に満ちた眼差しなんだろう。

記憶を失う前の私は、よほど彼に愛されていたらしい。

(この人なら……もう一度好きになれるかも)

たとえ記憶が戻らなくとも、この人とならきつとやり直せる。そんな気がする。

「ご迷惑をおかけすると思いますが……これからよろしくお願いします  
す、オリヴィエ様」

ぺこりと頭を下げると、オリヴィエが私の唇に指を押し当てた。

「様はいらないよ。オリヴィエって呼び捨てにして？」

「でも……あなたは王太子様なのでしょう？　呼び捨てだなんて、そんな……」

「だって記憶を失う前は、君は僕のことを気軽に呼び捨てにしてくれてたんだよ。だから……ね？」

「……分かりました。オ、オリヴィエ……」

おずおずとそう呼ぶと、オリヴィエはにつこりと微笑んだ。

「ありがとう。これからよろしくね。婚約者さん」

——それから数日後。

療養期間を終えた私は、日常生活へ戻るためのリハビリを始めた。

王太子妃の教育は想像以上に厳しかった。

ダンスでは足を踏み、歌では拍子を外し、それでも教師は「以前より上達しています」と笑った。

——以前の私は、どれくらいできていたのだろうか。

思い出せない。でも、今はレッスンに集中しようと決めた。

その方が気も紛れるし。

……なんだか子供頃にも、そんな経験をした気がする。

具体的には何一つ思い出せなかったのだけれど。

「やあ。調子はどう？」

午前中のレッスンを終えてテラスで休んでいると、オリヴィエがやってきた。

勉学に励む私を気遣い、公務の合間を縫って様子を見に来てくれて

いるのだ。

「マナーはだいぶ覚えられました。歌は……やっぱりちよつと苦手です。いつも一拍遅れると注意されてしまうので」

「君は記憶を失う前から、歌は苦手だとしきりに言っていたね。もともと得意ではないんだから、無理に頑張らなくても大丈夫だよ」

「そう……なんですね」

過去の私について言及されると、どうしても気持ち少し沈んでしまう。

レッスンを受けても、失った記憶は何一つ戻らない。

こんなにも良くしてもらっているのに、自分だけが取り残されている気がして胸が痛んだ。

「……どうしたの？」

うつむいている私を心配したのか、オリヴィエが心配そうに顔を覗き込む。

「私、いまだに何も思い出せなくて……申し訳ありません」

「謝る必要なんかないよ。努力ではどうしようもないことなんだから。それより、これからの生活について考える方が大切だよ」

オリヴィエが私の肩を抱いて、諭すように言う。

確かにそうだ。失った記憶についてくよくよ考えていても仕方がない。

「だから……そろそろ夜の生活を復活させるのは、どうかかな？」

「……え……っ」

オリヴィエも照れくさいのか、頬を染めて気まずそうに手を遊ばせている。

きつと、勇気を出して提案してくれたのだろう。

(私は彼と、どんなセックスをしていたんだろう……?)

記憶を失った今、オリヴィエとはほぼ初対面に近い状態だ。

だから彼と肌を合わせるのは緊張するけれど。

(この人となら……大丈夫な気がする)

彼と愛し合った記憶は失われてしまったけれど、愛情深いオリヴィエ

エとはきつと強い絆で結ばれていたのだから。

それに——彼に抱かれれば、もしかしたら愛撫がトリガーになって、

何か思い出せるかもしれない。

「あ……っ。嫌なら無理とは言わないよ？ 君の気持ち固まるまで、

ずつと待つから」

「……いえ。ぜひお受けしたいです」

私の答えを聞くと、オリヴィエは顔をほころばせた。

「良かった。じゃあ……今日の夜、君の部屋へ行くから」

「はい。お待ちしています」

「じゃあ、僕はこれで失礼するよ。また……夜に」

オリヴィエが私の手を取り、甲へ口づける。

柔らかな唇が触れると、とくと胸が高鳴る。

私はすでにオリヴィエに恋しているのかもしれない。

だとしたら、なんて幸せなのだろうか。

記憶を失つても、もう一度やりなおせる。

(私たちは……ここから始まるんだ)

これから新しい関係を、構築していけば良い。そう思うと気持ち

上向きになってきた。

(よし……午後のレッスンも頑張ろう……！)

日が沈み、王宮の灯りが全て落とされる頃。

湯浴みを済ませ就寝の支度を整えた私は、ベッドへ腰掛けオリヴェエの訪問を待ちわびていた。

(本当に……来るのかしら?)

櫛で髪を梳きながら考える。約束はしたけれど、気が変わって来ないのかも。

そもそも、こういう時の作法はまだ全然学んでいないし。

(……早まった、かしら)

この世界ではセックスが何より尊ばれ、外交にも影響するレベルだと教師から聞かされた。

私も記憶を失う前は、セックスについて学ぶ学園に通っていたらしい。

男女の交わりがどういふものか、というのは今学び直している最中のだけけれど。

この世界の成り立ちから勉強している身では、なかなか追いつかないのが実情だ。

(ああでも、来てくれると嬉しいのだけれど……)

コンコン。

控えめなノックの音が小さく響く。

慌てて立ち上がり、扉に駆け寄る。開けると、そこには外出着に着替えたオリヴィエが立っていた。

「こんばんは。遅くなつてごめんね」

「いえっ、とんでもありません。どうぞお入りください」

部屋へ招き入れ、扉を閉める。

ゆるく胸の前で腰紐を結んだガウンを羽織っただけの姿は、なんだかやけに色っぼい。

はだけたガウンの間から、うつすらと盛り上がった胸筋がちらりと見えたりして……♡

(……な、何考えてるの私……っ♡いやらしい……っ)

「あ、あの……こちらへ、どうぞ」

ベッドへ案内し、二人並んで腰掛ける。

(ここから、どうすればいいんだろう……?)

セックスに関する授業はまだ始まったばかりなので、男性と行為に及ぶ際のマナーなどは何も知らない状態だ。

下手なことをすると、彼に對して無礼かもしれないし。

そう思うと、何も出来なくてただうつぶいて黙っているしかない。

(どうしよう……オリヴィエ、がっかりしてるんじゃないや……)

気の利いた会話一つできない自分がイヤになる。

つまらない女だと、オリヴィエも失望しているかもしれない。

「もしかして……緊張してる？」

オリヴィエが少し距離を詰め、私へ顔を寄せてきた。

「は、はい……初めて、なので……」

「君にとつては、そうだよね。なんだか、僕まで緊張してきたな。ま

るで……初体験みたいだ」

そつと手を重ねられ、指が絡みついてくる。

指の間に手を差し入れられて甲を撫でられると、くすぐったいよう

な、少しそわそわするような……なんとも言いがたい感覚に囚われる。  
（ただ、手を繋いでいるだけなのに……なんだかすごく、えっちな気分になっちゃう……♡）

「大丈夫。君の気持ち良いところを僕は全部知っているから……」  
ふっ、と耳に熱い吐息がかかる。

「あ……っ♡」

ぞくんっ♡と背筋が波打った。

（これから私……この人とえっちなこと、するんだ……♡）

お腹の奥がずくん♡と疼く。記憶を失っても、本能が覚えているものらしい。

気づけば自分から、オリヴィエの肩にしなだれかかっていた。

「ふふ……甘えてくれるの？ 可愛いね」

オリヴィエの指先が、耳の形を確かめるように何度も裏側をなぞる。

「ん……は……♡」

耳から頬の輪郭を伝い、指が唇をたどる。

「ん……ちゅう……♡ちゅぷ……♡」

指を口に差し入れられ、うっとり吸いつく。

「ふふ……♡夢中で指にちゅうちゅう♡吸いついて……まるで子猫みたいだね、可愛い……♡」

にゅる……♡すり……すり……♡にゅぷ……♡

指先で舌をまさぐられ、甘く引つかかれる。

「ん……ふぁ……あ……ん……ちゅう……♡」

まるでおまんこを弄られているみたいなき分になって、身体の内側が多られたように熱を孕む。

(こんなことで……興奮するなんて……私……いやらしいのかしら……)

ちゅぽん……♡

唇から指を引き抜かれ、ネグリジェの胸元から手を差し入れられる。

ぬちや……♡

唾液でぬめった指先が、乳輪に置かれた。

ふに……♡ふに……♡

「あ……♡」

「乳輪がもう、ぷっくり膨らんでいるね……♡君も、興奮してくれているのかな？」

「や……あ……♡は……うん……♡」

くにゅ……♡くにゅ……♡

指を乳輪に深く沈ませて揉み込まれ、たぶ♡たぶ♡と乳房ごと揺らされる。

じわ……♡と甘痒い疼きが乳房の内側から生まれて、お尻の付け根まで滲んでゆく。

「あ……あ……♡じらさ、ないでえ……♡」

「ふふ……悶えてもじもじしているのが可愛くて……もつと見たくなくなってしまうな……♡」

くるくると乳輪をなぞられ、ぴとり♡と乳首の根元に指を置かれる。そのままぴんっ♡と下から弾かれて、「ひんっ♡」と高い声で叫んでしまった。

「そっ♡それええ♡だめ……ですう♡」

「ああ……♡やつぱり君はこれが好きなんだね♡記憶を失う前もこう

やって乳首を弾くと、腰をへこつかせて悦んでいたよ……♡」

ぴんっ♡ぴんっ♡

指でぐう♡と乳首を持ち上げられて、何度も強く弾かれる。

「ひゃう♡あっ♡ひっ♡んっ♡ううっ♡」

「気持ち良さそうに鳴いてくれるね……♡もっと可愛い声、聞きたくなってしまうな……♡」

かりかりかりかりっ♡

硬く膨らんだ乳頭を、左右から指で引っ搔かれる。

緩急を付けてかきむしられると、内側に溜まった甘い熱がどんどん膨れあがって、身体の中を侵食してゆく。

「君は本当に乳首が好きだね……♡ほら……♡これが、君の大好きな弄り方だよ……♡」

「はううううんっ♡」

こりこりこりこり♡かりかりかりかり♡

きゅう♡と乳頭を指で挟み込まれて、中指で小刻みに引つかかれる。胸の中でぱちぱちっ♡と快感の粒が弾けて、乳房全体がぼわあ……♡と熱くなる。

「っあ……♡は……っ♡あ……ふああ……♡」

(あ……♡これ……何か……覚えがある、ような……?)

記憶の底から、もやのように何か立ち上る。

でも……誰かもう一人、自分の身体を荒々しくまさぐっていた男性がいた、ような……?

気のせいだろうか?

「……あの……」

「ん？ 何？」

「私と一緒に馬車に乗っていた、リシャル様という方とは……どう  
いう関係だったのでしょうか？」

ふっ、とそんなことが気になってしまった。

そういえば、私とオリヴィエとの関係については詳しく教えてもら  
えたけれど、リシャルについては何も聞かされていない。

一緒に視察に向かっていた位だから、何かしらの関係はあるのだろ  
うけれど。

「彼は、僕の双子の弟だよ。あの日は僕が別件で同行出来なかったか  
ら、付き添ってもらっていたんだ」

「私とリシャル様は……仲が良かったのでしょうか？」

「どうして、そんなことを聞くの？」

「……なんだか、あの方とも関係が深かったような気がして……」

「彼は親身になって、君の世話を焼いてくれていたからね。君のことを心配してくれていたんだよ。僕と君の仲を応援してくれていて、とても優しい弟だった」

「……そう、なんですね」

「彼も……早く目が覚めるといいんだけどね」

オリヴェイエの顔が愁いを帯びる。もしかしたら余計なことと言ってしまったのかも。

「ごめんなさい……私のせいで……リシャル様がこんなことに……」

「謝らないで。君のせいじゃないよ。それに、わが国の医療チームはとても優秀だからね。きっとリシャルが元気に目覚めると信じてい

るよ」

「……………」

「だから……今はこっちに集中して？」

きゅううううう♡

左右の乳首を指で挟み込まれ、目一杯引き上げられた。

「~~~~……………♡♡♡♡~~~~…♡♡♡♡」

こりこりこりこりこりこり♡しこしこしこしこしこしこしこしこしこし♡ぐぐにい♡  
すりすりすり♡

ぴん♡と屹立した乳首を集中して舐るように、指で絶え間なく扱いて根元から押し倒し、ぐにぐにとこね回す。

耐えかねて前のめりにがつくん♡と身体を折ると、オリヴィエが腕を腰に回し、強く抱き留める。

逃げることを許されず、ひたすらに甘痒い刺激を乳首に与えられて。  
オリヴィエの腕の中でへこお♡へこお♡と腰を揺らし、お尻を彼の  
股間へ押しつける。

「はっひい♡うあっ♡あっ♡あっ♡だめっ♡オリヴィエ♡♡♡  
♡これっ♡♡♡だめっ♡」

快感を逃がそうと、足の指をめちゃくちゃに動かす。

けれどそんな抵抗はこみ上げる熱を散らすどころか、ますます煽り  
立ててしまう。

「もうイっちゃいそうだね……♡いいよ、思いきりイッて……♡初め  
ての乳首イキ、しっかり見守ってあげるから……♡」

きゅううううううう♡

「……♡♡♡」

ぐりいいいい♡

乳首を指で思いきり押し潰され、がつくん♡と大きく身体が揺れる。折り返った快感が一気に膨らんで、お腹の中でぱちん♡と弾けた。

「つあ〜〜……………♡♡♡あつ♡あつ♡あああああ〜……………

♡♡♡

びくびくびくうううう♡

全身がわななき、悲鳴じみた声をあげて仰け反る。

「ふふ……………初めてなのに、上手にイクイクできたね……………♡さすがだよ

……………♡

いたわるように、オリヴェイエの指が頬を撫でる。

「は……………ふえ……………♡

私の頬をさすりながら、片手がつう……とネグリジェの裾をめくる。  
そのまま彼の手が、ショーツの中へと潜り込んだ。

「あ……っ♡」

指先が一瞬彷徨い、股間の中心でそびえたつゴムのような素材に覆われた肉芽をそつと摘まんだ。

「ひゃう……♡」

「良かった。コレは嵌めたままできてくれたんだね」

ふとももの隙間に手を差し入れられて、足を大きく開かされる。

ずり落ちたショーツから、濃い桃色の大輪の花を描いたクリトリス  
ケースが顔を覗かせた。

「これは、君のためだけに作った、世界でひとつだけのクリちんぽ  
ケースだよ」

「クリ……ちんぽ……？」

初めて耳にする言葉だ。クリトリスとは違うのだろうか？

「君のクリトリスは、僕が時間をかけてじっくりと育てた、ちんぽのように立派なクリトリスなんだ。だから……そう呼んでる」

オリヴィエが私に折り重なるように背後から覆い被さり、ケースごと肉芽を握りしめちゅこ♡ちゅこ♡と扱きはじめる。

「ごめん……なさい……何もわから……ない……♡」

「そっか……仕方ないな……でも、まだ療養が終わったばかりだしね。でも、僕が育てたクリちんぽは、しっかり覚えてくれているみたい」

くに……♡くに……♡ちゅこちゅこっ♡♡

クリちんぽケースを摘まんで揺らされると、内部にびっしり張り巡らされた粒が、ぞぞぞぞっ♡とクリトリスを擦る。

ぞわぞわっ♡と甘い痺れが生まれて、腰がへこお♡へこお♡と揺れてしまう。

「はっひ……♡あ♡はっ♡あああ……♡わ、私っ♡いつもっ♡こんなことっ♡されていたんですかっ……♡」

「そうだよ？ 君は毎日こうやって……僕にクリを愛されていたんだ」

「こっ……♡こんないやらしいことを、毎日……？」

「もちろん。君も、セックスについては学んでるだろう？ 婚約者たるもの、愛を深めるために行為に励むべきだと」

「ふあ……っ♡」

ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこっ♡

クリちんぽケースの中でクリを揉みくちやにしながら、オリヴィエ

が続ける。

「君のココ、昔よりずっと綺麗になったね。僕が大切に育てたからかな……♡」

「はうう♡」

ぎゅっ♡とクリちんぽケースを押しつけられ、ツブツブが肉芽を圧迫する。

きゅんっ♡とクリとおまんこの間が強く窄まり、身体を二つに折って内股を擦り合わせる。

(なっ♡何これえ♡きもちいっ♡)

セックスがどういふものか——というのは、なんとなく覚えている。でも、気持ちよかったかどうかまではわからない。

オリヴィエとは、何度かしているのだろうけれど。何もかもが初め

ての経験で、戸惑うばかりだ。

（クリトリスは……性感帯だつて、教えて貰っていたけれど……こんなにっ♡気持ち良かったなんてっ♡）

自分から腰を突き出し、オリヴィエの指に肉芽を擦りつける。

「ふふ、積極的だね。そんなにクリを弄られるのが好き？」

「……はい……♡このまま……気持ちよくなったら、何か思い出せるような気がして……っ♡」

「確かに、快感から記憶が蘇ることがあるかもしれないね。じゃあ、君におまじないをかけてあげる」

オリヴィエが私の頬を両手で包み込んだ。

「おまじ……ない？」

「そう。君がめいっばい、気持ち良くなれるおまじない。記憶を失う

前は、いつもやっていたんだ」

「……本当に？」

どくん、と胸が高鳴る。

もし、行為の前にもいつも【おまじない】を行っていたとしたら。

(記憶を取り戻す、きっかけになるかも)

「じゃあ……いくよ？」

オリヴィエの顔が、ゆつくりと近付いてくる。

「ん……う……♡」

唇をちゆう♡と吸われ、歯列を割って舌を差しこまれる。

唾液をとろりと流し込まれると、口の中が燃えるようにかあつと熱くなつた。

「……全部、飲んで？」

言われるがままに、喉を鳴らしてごくんと飲み干す。

熱い塊がお腹の下へと落ちてゆき——ずしんっ♡と重たい衝撃が下腹部に広がった。

「くく………ッ!? あ……あ……くく………ッ♡」

ひくんっ♡ひくんっ♡とお腹の奥が蠕動して、クリトリスにきゅううっ♡と急速に血が集まってゆく。

身体の間々まで熱が駆け巡って、ずくん♡ずくん♡と疼きが止まらない。

「な……っ♡なに……これえ……♡からだ……あつ……い……♡」

「ふふっ……とつても気持ち良くなれおまじないだよ。こうすれば、限界を超えてイクことができる」

「ふ……あ♡はっ……はあ……っ♡そうしたら私、何か思い出せるん

ですか……？」

「もしかしたら……だけどね。今は方に一つの可能性にかけてみようよ。僕は君の記憶を取り戻すためなら、なんだってしたいんだ」

「わたしの……ため……？」

「そうだよ。だって、僕は君を——愛しているから」

「く………ッ♡」

切なさをたたえたエメラルドグリーンの瞳で見つめられて、キュン♡とお腹の奥がわななく。なんて甘美な響きだろう。

私は彼のことを何一つ覚えていないのに。

彼は深い愛情を持って、私を包み込もうとしてくれている。

「オリヴィ……エ……抱いて……♡クリも……おっぱいも……♡隅々まで私の身体を触って……♡あなたの指で記憶を呼び覚まして……」

っ♡

気づけば私は、熱に浮かされるように彼に体を擦りつけて懇願していた。

彼は微笑み、私の首筋に指を這わせる。

「もちろんだよ。君の身体に僕の指先の記憶をみっちり叩き込んであげる……♡僕が触れていないところが、ないようにね……♡」

にゅ……っぼん♡

「おっ……♡」

ゆっくりとクリちんぽケースを引き抜かれる。

内側の突起が肉芽と擦れあい、びくん♡と腰が震えた。

「ココを、直接愛してあげる」

オリヴェイエが私の足の間にひざまずき、内股にキスをする。

そのままそけい部から恥丘に唇を這わせてぴーん♡と勃起したクリトリスを口に含んだ。

「~~~~~……ツ♡♡♡ひ……い……ツ!?」

くちゅ……ちゅぶ……♡ちゅぶ……♡

口の中で剥けかけのクリを揉みくちやにされて、両足が勝手に浮き上がる。

裏筋をれろれろと舐め転がされて、腰のびくびくが止まらない。

(何……これええ♡お腹っ♡じんじんっ♡止まらないっ♡)

ずつくん♡ずつくん♡

下腹部を内側から突き上げるような衝撃が、どんどん重くなってゆく。

「はっへえええ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡やああ♡だめっ♡クリっ

♡くちやくちやにつ♡しないでええ♡」

「ん……ちゅ……ちゅぷ……♡ああ……ダメだよ、逃げちゃ……♡せっかく、ぷりぷりで食べ頃に膨らんでるんだから……♡しっかり、味わわせて……♡」

へこお♡へこお♡と揺れる腰をガツチリ押さえ込まれ、更にぢゅううううう♡と根元から肉芽を吸い上げられる。

涙の膜で視界が滲んで、ぼやけて何にも見えない♡

「っひ♡あっ♡やあああ♡落ちるっ♡怖いっ♡これっ♡やあああああ  
ああ♡」

ぼろぼろと涙をこぼしながら「いやいや」と激しく首を横に振る。

「大丈夫……♡落ちて僕が受け止めてあげる。だから……クリとおまんこ、一緒にアクメしようね……♡」

にゅぽお……♡

「ふぁ……？」

唇から、真っ赤に熟れた勃起クリちんぽが引き抜かれた。

唾液でぬめったクリトリスが、淡い蠟燭の灯りに照らされ淫らな光を放つ。

オリヴェイエは私の股間に顔を埋め、今度は淫裂へ唇を寄せた。

「……♡♡♡あ……♡あ……♡……♡……♡……♡」

にゅぷうう♡ちゅぷ♡ちゅぷ♡ちゅぷ♡

(うそおお♡舌♡おまんこの中♡入♡入♡入♡)

舌が自在に蠢いて、褻をれるお……♡と舐め回す。

身体の内側を直に揺さぶられて、頭の芯がどろどろに蕩けていく。

突き出した股間の中心にそびえたつデカクリを、オリヴェイエが指で



もきつと、その方が幸せだから……♡

にゅっ♡にゅっ♡にゅっ♡にゅっ♡にゅっ♡

ぽつてり♡腫れた肉天井が、丸めて尖らせた舌先で突かれる。

同時にクリちんぼの中心の硬いところを指でぶぢいい♡と潰されて、のけぞり悶絶する。

「はへえええ♡一緒にいい♡らめ♡らめ♡らめえええ♡」

お腹の奥が引きつって、目の裏でチカチカと光が明滅する。

押し寄せる快感に追い立てられるように、じたばたと両足をばたつかせる。

「っあっ♡くりゅっ♡何かくりゅっ♡おぢるううう♡わらひっ♡また♡おぢるううううう♡」

「好きなだけ落ちて……♡めいっぱいイッて、アクメの記憶を取り戻

そうね……♡」

くりくりくりくりくりくりくり♡ぬぢいい♡くにゅくにゅくにゅくにゅ♡

クリを平たく押し潰され、めちやくちやにこね回される。

限界まで膨らんだ快感の塊が暴れ回って、ぎゅううううう♡痛いくらいに秘奥が収縮する。

「だめええ♡これ以上されたらああ♡もおイツ……いい……ッ♡」  
ぐにいいいいいい♡

とどめとばかりに、ぼつてりと膨らんだ肉天井を思い切り舌で押し上げられた。

針で突かれたような小さく、けれど鋭い衝撃が突き抜けて――

「……♡おっ♡おおお……♡……♡♡♡」

ぴーんと足を反らせて舌を突き出し、がくがくと全身をわななかせる。

ふっ、と一瞬身体の力が緩んで――

ぴゅっ♡ぴゅっ♡ぴゅっ♡ううううううううっ♡

おまんこから透明な液体が小さくしぶいて、オリヴィエの口元をべつたりと濡らした。

「ん……♡女の子射精、しちゃったね……♡」

「……っ♡ごっ、ごめんなさい……！ 私っ、なんてことを……っ

！」

「ん……大丈夫だよ……♡君から出たモノなら……全部……飲み干したいくらいだ……♡」

ちゅう……♡

中から液体を吸い出すようにおまんこに口づけられて、また甘くイッてしまう。

こくんと喉を鳴らして、私の体内から放出された潮を飲み干すオリヴィエ。

こんなにも……私を愛してくれているなんて……♡  
「僕の愛撫でこんなに感じてくれるなんて、嬉しいな……♡ほら、僕のココもこんなに……大きくなっちゃったよ」

手を取られ、オリヴィエの肉棒に触れさせられる。

(……っ♡あ、あつい……っ♡)

「今日は……愛撫だけにしておこうと思ったんだけど……君の中に挿れたい……♡ダメ……かな？」

私にすがりつくようにして見上げてくるオリヴィエ。

「……っ♡」

(こんな目で見つめられたら……断れない……♡)

頬を染めて頷くと、オリヴィエがまるで猫を撫でるように、私の顔の輪郭をそっとなぞる。

「……本当に、いいの？」

「……はい……♡あなたのおちんぽで……私のおまんこの記憶を、掘り起こしてください……♡」

「ふふ……♡たくさんアクメして、子宮に記憶を呼び覚ませようね

……♡」

オリヴィエがするり、とガウンを脱ぐ。

細身だと思っていたけれど、思いのほか逞しい体つきにドキツとする。

そして――

(なんて……大きなおちんぽ……♡)

セックスの座学も受けていて、男性のペニスの平均的な大きさなども学んでいたけれど。

オリヴィエのそれは、かなり大きな気がする。

(こ、こんな立派なおちんぽ……私の中に受け入れられるのかしら……♡)

どぎまぎしつつ、視線がついつい下腹部に吸い寄せられる。

私の視線に気づいたオリヴィエが、照れくさそうに頬を染めた。

「そんなにじつと見つめられると、恥ずかしくなってしまうな」

「ご、ごめんなさい……！　とても……立派なおちんぽだったので、

つい……」

「フフ……欲情してくれたの？ 嬉しいな」

オリヴィエが私の上へと覆い被さる。

ぬぢゅ……♡ぬぢゅ……♡

亀頭を股間に擦りつけられ、ぬるぬると滑る。

そのままぬりゅん♡とナカにおちんぽが入ってきて――

「……♡は……ああああ……♡♡」

ぴつちりと閉じた中が割り開かれていくのを感じる。

それはどンドン奥まで進んでいって、自分の中はこんなに深かったのかと驚かされる。

「ああ……君のおまんこは、僕のちんぽをしつかり覚えてくれているみたいだね……♡悦んでびくびく♡うねっているのを感じるよ……♡」



じいじいじい……んっ♡

まるで骨の髄まで染み渡るような深い快感が身体の奥に響く。

(私……これ……知ってる、かも……っ♡)

何度も何度も刻み込まれた愉悦。

ふわふわと全身が宙に浮いたような、エクスタシーの向こう側。

でも……なんだかお腹の奥がむずむずする。

確かに彼のペニスはあらかじめ用意されていたかのようにしつくりと馴染むけれど。

何かが欠けている気がする。

彼ではない誰かの楔が、私の奥深くに刻まれているような……

「オリヴィエ……私……怖い……っ♡なんだか……あなたじゃない人に、抱かれていたような気がするの……どうして……？ 私……一体

何があつたの？」

「……大丈夫。全部気のせいだよ。急にイキすぎて、頭が混乱してしまつたのかもしれないね」

「本当……に？」

「本当だよ。君はずっと僕だけのモノだ。これまでも——これからも。だからどうか安心して、僕に身を委ねて……」

ちゅう……♡

また、甘やかなキスが落とされる。

蜂蜜みたいな甘い唾液が、口の中を満たしてゆく。

「もう何も心配しなくてもいい。不安は僕が全部取り除いてあげる。

ただ、君は気持ち良くなっていればいいんだ」

(あ……また……頭、ぼーっとしてきた)

まるでピンク色の濃霧の中にいるみたい。ぼわつと脳が弛緩したみたいになつて——思考がほろほろと崩れてゆく。

何も思い出せない焦燥感も、寄る辺ない不安も。

全部崩れ去つて、風に吹かれるように濃霧の向こうに消えてゆく。

「つぁ♡はあつ♡あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡」

こちゅ♡こちゅ♡こちゅ♡こちゅ♡

腰を高く持ち上げられて、膣奥の深いところをさらに抉られる。

柔らかく蕩けた秘奥をこちゅん♡こちゅん♡と切っ先が小突いて子宮を小刻みに揺らす。

このままでいい。このままがいい。

ただこの快感に身を委ねて蕩けてしまえたら——

「オリヴェイエ♡♡♡オリヴェイエ……♡もっ♡もっ♡として♡私

にっ♡あなたのおちんぽのかたちっ♡思い出させてっ……♡」

「いいよ……♡僕のちんぽの形を……深く刻み込んであげる……っ

♡」

ば……ッちゅんっ♡

引き抜いたおちんぽが、再び大きくたたき付けられる。

ポルチオを押し上げ、ぐりぐりぐりぐりいいいいいっ♡と小刻みに揺らされて。

身体の芯を蕩かせる重く甘い快感に支配されて、もう逃げられないっ♡

「っ………っ………っ………ッ♡あっ♡あっ………ッ♡」

ぎゅううううう♡とオリヴェイエの首にしがみつき、自分から足を腰に絡みつかせる。

(あああああ♡これっ♡すきっ♡すきいいいい♡)

「っ……はあっ♡はあっ♡はあっ♡ずっと……僕のちんぽの形だけ、覚えていて……♡他の誰のモノも……受け入れないで……全部……忘れたままでいて……♡」

「っ……あ♡はひ♡んう♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

どちゅん♡どちゅん♡どちゅん♡

体重をかけられ、子宮がへしやげるほどに亀頭で突き上げられる。

どんっ♡どんっ♡と殴られるような衝撃で息が出来ない。ぐらぐらと頭の芯を煮溶かされて、ぐずぐずに溶けていく。

苦しい。怖い。熱い。落ちる。溶ける。——きもち、いいっ♡

どちゅ……んっ♡

一層深く、切っ先が秘奥へ沈み込む。

「~~~~~………ッ♡ひ……い………~~~~~………ッ♡」

ぎゅうううううううううう~~~~♡

お腹の奥がねじれるほどに強く窄まり、渾身の力で肉棒を喰い締める。

限界まで膨らんだ快感の塊が、ばちんっ♡と一気に爆せて——

どぶうううううう♡どぴゆるううううううううううううううううう♡♡♡

「~~~~~………ッ♡い………ッ♡あ~~~~~………………ッ♡」

白濁が子宮に注ぎ込まれ、お腹の底が熱を孕む。

「っ……ふっ……ふううう……♡子宮……ごくごくっ……♡美味し

そうに……ちんぽミルク飲んでるね……♡僕のミルク……たくさん

……飲んで……っ♡」

ぐりい♡

強く股間を押しつけられて、ぶびゅつ♡と残滓が吹き出す。

最期の一滴まで注ぎ込み、力尽きたオリヴィエが私の上へ折り重なった。

「はあ……♡はあ……♡はあ……♡君の身体はしっかり僕のちんぽを覚えてくれていたみたいだ。嬉しいな……♡」

汗ばむ額にオリヴィエがちゅつ、と口づける。

頭が白く霞んだままで記憶の欠片は浮かんでこないのに、身体だけはじんじん♡とオリヴィエに刻み込まれた快感を反芻して。

確かに私は、彼とかつて愛し合っていたのだということだけは、理解できた。

「もつとセックスしたら……何か思い出せる、でしょうか」  
ぽつりと呟くと、オリヴィエがうなずく。

「うん……きつとね。だからこれからたくさん……愛し合おう」  
抱きしめられ、そのままふたり並んでベッドへ寝そべる。

遅しいオリヴェイエの胸に頬を寄せると、とても落ち着いて、ほっとして。

そのまま私は、緩やかに眠りへと落ちていった。